



ピラカンサス

28編はダビデの詩とされています。詩人は 嘆き祈るわたしの声を聞いてください(28:2) と、神に呼び求めました。詩人は神が沈黙しておられるのではないか、と思い、率直に、「沈黙しないで下さい」と求めています。なぜなら、このままでは自分は神の御業、御手の業に従いたいと願っていても、神に逆らう者、悪を行う者、裏腹な者が力を振っている、自分自身も彼らの側に引きずられていく、と嘆いています。彼らの手のなすところに応じて報い、罰してくださいと祈っています。

そして、この祈りを捧げているうちに、嘆き祈るわたしの声を聞いてくださいました(28:6) と、感謝の祈りに変わっていくのです。この間の事情はなにも語られていませんが、詩人は祈り続けているうちに、神の力、神の助けを確信したのです。そして主に立てられた者として、目覚め、主は油注がれた者の力、その砦、救い。お救いください、あなたの民を。祝福してください、あなたの嗣業の民を。とこしえに彼らを導き養ってください(28:8) と、神の民として、守り導いて下さいと自らの民のために執り成しの祈りを捧げています。信頼して祈り続ける時に、平安と力を頂けるのは、不思議な事だと思わずにいられません。「讚美歌 21」では 467「われらを導く」を関連付けています。詞、曲ともにウエールズの作者です。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=l5NOVcefEYU>

29編は、韻を踏み、比喩、隠喩を豊かに用いた、詩的な賛歌です。最初に高らかに 神の子らよ、主に帰せよ(29:1) と、「主に帰依(南無)」と、4回唱えています。次に 主の御声は水の上に響く(29:3) と、「御声が響く」と、4回唱えています。続いて 主の御声は杉の木を砕き(29:5) と、「御声の力強さ」を称えます。周辺の敵対する地域、レバノン、シルヨン(ヘルモン山)、カデシユ(荒れ野の地方)は、砕かれ、子牛、野牛、雌鹿のように悶えさせられると何度も歌います。最後に 主は洪水の上に御座をおく。とこしえの王として、主は御座をおく(29:10) と、「洪水(=裁き)」の上に御座を置かれる神を賛美し どうか主が民に力をお与えになるように。主が民を祝福して平和をお与えになるように(29:11) と、平和を求めて祈っています。

参照 [https://www.youtube.com/watch?v=AxZC\\_uo5Bgo&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=29](https://www.youtube.com/watch?v=AxZC_uo5Bgo&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=29)

30編の端書きは「神殿奉獻の歌。ダビデの詩」となっていますが、ダビデは息子ソロモンに神殿を建てることを命じ、神殿建立の前に亡くなりましたので、ダビデの詩として理解することはできませんし、内容が神殿とは全く関係ありません。

むしろ、死の危機から救われた感謝、あるいは復活の命に与った感謝の歌と言えるのではないのでしょうか。わたしを引き上げてくださいました(40:2)、あなたは癒してくださいました(30:3)、さらに 主よ、あなたはわたしの魂を陰府から引き上げ／墓穴に下ることを免れさせ／わたしに命を得させてくださいました(30:4) と、歌っているのです。ここには、さまざまな弱さを抱える人々の姿が描かれています。神に怒られる人、泣きながら夜を過ごす人、不穏な折には信仰が揺らぐ人、神を見失い恐怖に陥る人。すべての人はそのような弱さをもって生きています。しかし、神は喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださると詩人は歌います。あなたはわたしの嘆きを踊りに変え／粗布を脱がせ、喜びを帯としてくださいました(30:12) と、とこしえに感謝を捧げますという賛歌です。「讚美歌21」には関連する讚美歌がいくつかありますが、551「朝の光、闇をはらい」は詞、曲共にドイツ人の作品で3拍子の元気のよい讚美歌です。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=fUKdiuJzvVQ>